

# 小さな善意

## 1. 友へ

大鹿村大河原中学校三年 M・Y

日本中のお友だちから、あんなにたくさんの手紙や品物が送られ、きたと知ったとき、私は、はずかしくなりました。今まで日本各地の不幸な人に、手紙を出そうと考へて書いたのに、ポストには入れなかつたからです。そして特に盲学校の人たちの手紙を読んだときは不自由なお友だちと思つたせいか、読んでは、苦しさに負け、いはいけなひのせいで思ひました。

あんなにたくさん品のなかには、貧しく、その日の生活も窮屈な人たちが送つてくれた物があつたのです。大函山の山くずれでケがをした私のおばさんの所へは、やる物がないからといつて自分の着ていたものを、洗濯つて使つてくれたさい。と、ぬいぢといつた人がいたそうです。こういう考への人物は、どんなに古くてもうれいものですよ。私はきつとこのようなりつばな人からの品物がたくさんあつたのではないかと思ひます。あのよりの災害のときには人の真心が一番ほしいものですよ。苦しむ時には何かたよりな気になるものですよ。ひとりでも多くの人に何か心の中のことをぶちまけて話し、しまいたいと、だれもが思つたこと、少し、少なくて、私はず

うでした。

ちようどお見舞の手紙に礼状をいたしましたら、ある人から二度目の便りもきました。私は文通はしまいませんでした。が、その人とは今まど三回ほどやりとりしました。手紙の内容もその人の成績やその地方の地理だけなく、何でも話せられる友だちでした。

これによつて私は日本中にはきつとよい友だちが大ぜいいるんだらうなあと思ひました。そして送つてくださった見舞の手紙、品物、お金などから、貧しくても苦しくても、自分のことばかり考へていない人が大ぜいいることも知りました。

(三十六年)